

4 論説文 (1)

■学習日

/

要点チエック

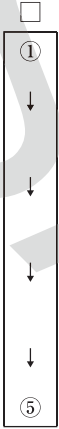
(1) 次の文章のそれぞれの——線部の指示語が指す内容を答えなさい。
 〈ヒト以外の動物は、環境に①その生存のすべてを託している。しかしヒトは、他の動物よりも優れた能力、つまり、文化を築く能力をもっている。②その能力を手にしたヒトは、環境に③その全生命をまかせるのではなく、あくまでも④それを対象とみることができ。〉

③	①
④	②

(2) 次のそれぞれの文の冒頭に入る接続語をあとから一つずつ選び、また、文の順序を正しく並べかえて答えなさい。(①・⑤は指定通りに)

① 日本は諸外国に比べて農産物の価格が非常に高い。
 ② 、国内の生産者を犠牲にはできないからだ。
 ③ 、ことはそう簡単には運ばない。
 ④ 、貿易の自由化を叫ぶ声が内外で高まってきている。
 ⑤ 、食料品を海外に依存することは、国家の安全保障という点において問題がある。

ア しかし イ なぜなら ウ また
 エ そこで



確認問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注) 語彙的に「ここでは「ある用語を用いて」の意味。
ピッチ＝声の高低の度合。調子。

〈大野晋「日本語について」より〉

□ (1) ① ~ ③ に入る最も適切な接続語をそれぞれ次から選び、記号
で答えなさい。

- ア そのうえ
- イ つまり
- ウ ところが
- エ たとえば

①
②
③

□ (2) ———線①「その区別」とありますが、具体的には何と何の区別か。それ
がまとめて述べられている部分を、本文中から二十六字(読点を含む)で探
し、その最初と最後の六字を書き抜いて答えなさい。

□ (3) ———線②「英独仏語の文では、文だけで一つの世界を構成するように表
現する」とありますが、「文だけで一つの世界を構成する」方法として適
切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 主語と述語を欠かさず置く。
- イ 既知の物事でも表現する場合がある。
- ウ 主語と述語の呼応を明確に表現する。
- エ 述語は必ず文末に置く。

--

□ (4) ④・⑤ に入る最も適切なことばを、本文中からそれぞれ漢字
二字で書き抜いて答えなさい。

④

⑤

練習問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

われわれの先祖は、知識としての科学はほとんど何もたないでいて、行動によって、科学を具現してきた場合が、案外に多い。そういうものを、ここでは、「行」としての科学と呼ぶことにしよう。

① まず一つ例をあげよう。昔の日本の農夫たちは、今日のいわゆる知識というものは、なに一つもっていないかった。自分の名前も書けないというのが、しばしばその枕詞として使われたとおりである。

ところが、そういう農夫たちが、自分では意識しないで、現代のいちじるしく進歩した農学の常識を、完全に打ち破っていたのである。それは、輪作の問題である。② 現代の農学では、農作物は、原則として、連作をきらうもので、毎年おなじ畑に、おなじ作物をつくってはいけないことになっている。諸外国では、たいてい七種か八種の作物をえらび、毎年畑をちがえてつくることを常道としている。

半永久的に収穫量を維持するためには、この輪作が絶対必要である。肥料をいくら完全にほどこしても、連作をつづけていると、地力が落ちて、収穫量は漸減する。地力というのは、あいまいな言葉であって、土のなかの微量の鉱物質、たとえば鉄などが欠乏すると、収穫がへる。それを地力の減退といっているだけで、詳細なことは、わかっていない。必要な元素の数と、その各々の量などは、まだ明らかにされていないとおもう。あまりにも微量であるからであろう。

ところが、この輪作の概念を、まったく無視して、千年間の連作をつづけ、まだ万年豊作などといっている農業がある。それはいうまでもなく、日本の水田稲作である。③ 日本の稲作は、登呂遺跡の時代からはじまり、多くの水田では、おそらく千年以上も、おなじ場所に、おなじ稲作をつづけてき

ている。それでいて、ちっとも収穫はへらない。これは農学の常識を完全に無視しているが、現にとれるのであるから、しかたがない。

その理由として、うなずかれるのは、溪水説である。日本の山は急峻であつて、雨水が山腹を流れくだる間に、山はだを適当に浸食し、地力保持に必要な鉱物質を微量とくす。その水を水田にひいているから、いつまでも地力が保たれるのである。専門外のことであるから、この説の当否はわからない。しかしいかにも、うなずかれる話である。

この説が妥当とすると、功績は日本の地形にあつて、農夫たちにはない、といわれる方がもあるかもしれない。しかしそれは実際にもを作ったことのない人の言葉である。天恵の水はあつても、その水を日夜調整して、天恵を生かしているものは、農夫たちの努力である。そのほか、古来の農家は、わらを堆肥として、水田へ返してやることも忘れなかった。

この千年間の連作のおかげで、この小さい島で、大勢の人間が、特殊の文化をつちかひながら、ささやかな繁栄をつづけてこられたともいえよう。もし水田稲作が、輪作を必要とするものだったら、この狭い島国で、しかも耕作可能な平坦地は、わずかに国土の二十パーセントにも足りない国では、どうにもならなかったであろう。

日本の食糧問題に、こういう偉大な貢献をした、日本古来の農家の人たちは、微量鉱物質のことも、河水への溶解度も、ぜんぜん知らなかったであろう。しかし科学の知識はなくとも、行としての科学は、立派に具現してきたのである。

知識がなくて、どうしてそういうことができたかというところ、米作が彼らにとって、文字どおりに真剣な問題であつたからである。稲の習性を十分に知り、わずかな異変の徴候でも感じとらなくては、生きてゆくことができなかったのである。そしてそういうささいな体験による知恵が、次第に蓄積し、それがつぎつぎと受けつがれて、生活の知恵として、身体にしみこんだのである。行としての科学は、この身体にしみこんだ知恵から生まれる。

